森久保がもりくぼになった時

雫。

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

森久保乃々がどうして「地味」という自己評価と矛盾してピアスをつけたりしているのか、どうして「もりくぼ」という一人称が混在するのか。その辺りを掘り下げた森久保乃々の前日譚です。

目　次

そこに私はいなかった　1
自傷行為、そして変身　3
出会い　6
私のせいなら　8
森久保乃々の独白　12
自覚なき決意　14
対話　16
信念、私はここに　19
全てが初めての　22
私の作った結果　26
今日から私は　28

そこに私はいなかった

……優しかったお母さんの振る舞いにあれ？　というのが見え始めたのは、そしてそれに呼応して叔父さんや叔母さんが私に何かを求めるようになったのは、中学に入ってすぐにの頃だったと思います。いえ、ほんとうは、もっと早くに兆候があったのかもしれません。私がお母さんの苦しみに気づいてなかっただけだったのかもしれません。……もっとも、私なんかが気づいていても、何かできたとは思えませんけど……。

ある日、私がお家に帰ってくると、お母さんは一心不乱に、テレビの中のアイドルを見ていました。最初は、ただの気まぐれだと思いましたけど……。でも、次第におかしいと思うようになりました。

……お母さんは、古今東西のアイドルやバンドに関する本を買い集めるようになり、積み上げられたそれを見ては海より深い溜息をつく、ひたすらそれを反復するようになりました。時には、ご飯を作ったり洗濯をしたりすることすら忘れて。目も怖かったです。画面の向こう側に何を見てるのか、もう帰れない遠い彼方を見ているような光の無い深淵の瞳でした。

そしてある時、お母さんは私にそういう本を見ることを暗に強要するようになりました。有無を言わさずに。そして繰り返すのです、乃々は私に似てきたねって。虚ろな目で私を見つめて頬を撫でながら。そして愚痴るのです、何度も同じ話を。夢を追うことが許されなかった昔話を、何度も。

……いえ、私を似ているというのは、実際にはもっと前からですけど。私を似てきたと初めて言った、その直後からお母さんは古いアイドルの本やビデオに没頭するようになりました。

……芸能界に繋がりのある仕事をしてる叔父さんからアイドルの代役の仕事を頼まれたのは、それからほどなくしてからした。

……最初からわかっていました。それが単なる代役ではないことくらい、代役なら他にももっと向いてる子がいることくらい。でも、叔父さんたちは私じゃないとダメなのだと言って、頭を下げながら外

堀を固めていきました。私が目立ちたくないことを、人見知りなことを逆用すれば、大人が私に嫌な仕事をするよう仕向けるのは、簡単なことでした。

わかっています、わかっているんです。それでも、私は一度だけ聞きました。……何故なのと。

すると叔父さんたちは、少し黙った後、こう言いました。お母さんも喜ぶよって。

思った通りです。叔父さんたちは、おかしくなったお母さんの心を満たすために、私を使っているんです。

そしてこうも言いました。森久保家のために頑張ってくれと。

私は、「乃々」としてではなく、「森久保」家のパーツの一つとして、壊れた他のパーツの代わりになるためだけに働いているのでした。私自身は誰にも必要とされていません。お母さんの青春時代の現し身として、代わりとなり得る存在が必要なだけでした。

私にそれを拒否する権利はありません。親を盾にとって、有無を言わせずに私を親のための生贄にするのです。でも、私にはお母さんの代わりなんてできません。

私はただの「森久保」……ただでさえ自分を主張できなかった私は、家族のトラブルと思惑に翻弄され、お母さんの代わりに、なるべく自分を押し殺すことを強いられました。「ただの森久保」、そうなるには、自己主張の乏しかった当時の私ほど都合の良い子供はいなかったのでしょう。

……なら、事前に予防線を張るしかないじゃないですか。私が失敗してお母さんが壊れても、私は言うべきことは言ったんだと。

無理……。むり……。むーりぃ……。

私はそうやって、お母さんの代わりを期待されながらも、それを壊していくのです。

自傷行為、そして変身

……私が嫌な仕事を、いや、お母さんの代わりをしなくてよくなるには、失望してもらうしかありません。森久保がお母さんではないことを知ってもらわないと、私が静かに暮らすことはできそうにありませんでした。何故なら、私の代役が予想以上に成功して、既に部屋から出られなくなっていたお母さんが少し元気になってから、叔父さんたちも熱に浮かされたようになったのです。もっとも、叔父さんたちの熱の何割かはお金も舞い込んでくるからというのもあったようですが……。

でも、どうしたらいいのだろう。私が自分を改めて作り直そうと思ったのは初めてです。今までは目立ちたくなかった、流行りに乗ってまで面倒な騒ぎに身を投じたくはなかった。私にとっての私らしさとは、静かに、平穏に、それをありのままだと言えるように過ごすことだったから。

手鏡を見ました。……サラサラのまっすぐな黒髪。形の良い耳。清楚で自然体の服装。まさに、昔のお母さんの写真に瓜二つです。これが、私が期待される理由です。

お母さんが私を過去の自分の代わりにしようとする理由で、叔父さんたちが、それに応えさせようとする理由です。同時に、お母さんが過去に戻ろうとするようになってしまった元凶でもあります。

……逆に言えば、この昔のお母さんにそっくりな、正統派の清楚アイドルに相応しいと言われる（自覚はないですけど……）見た目さえなければ、森久保はただの地味で臆病で駄目な子。ただの駄目な子に戻れるんです。森久保家のみんなを裏切ることになっても、私は私に戻れるんです。そうなれば、この苦行からは解放されるのかも……。さらに言えば、もとからこの見た目でなければ、お母さんがおかしくなることもなかったかもしれないのです。

……私はこれまで誰かに必要とされたことなんてありません。私が必要とされたのは、お母さんに夢を見続けさせるための、今回が初めてなんです。私、乃々が必要とされているのではなく、お母さんの

現し身としての森久保が必要とされてるだけ。……そこにほんとうの私はいません。

森久保はお母さんの失われた青春のための生贄。ならば、それに値するだけの価値がない子になってしまうしかないじゃないですか。

幸いにして、アイドル活動という苦行を始めてから、お小遣いだけは余裕があります。このお金さえあれば、森久保はお母さんの影から解放されるかもしれないわけです。

だから私は、散歩コースにしている人のいない森をたまたま、やるせない気持ちになって普段より長く歩いて、隣町に抜けてしまった時、ある意味他にはないと思いました。……親が連れて行ってくれなかった隣町には、私のお小遣いで十分に利用できる美容院やその他の施設があっから。

……今思えば、理由はそれだけでもなかったのかもしれません。もともと人に見られるのが苦手だった私が、いざ見られてみればそれはお母さんの代わり。ならいっそ、私をせめて見て欲しかったのかもしれません。

……抵抗はありました。入る時は、頼む時は魂が消し飛ぶかと思いましたけど……それでも一歩を踏み出せたのは、多分、森を抜けた先にある街だったからでしょうか。

そんなわけで私は、母から受け継いだ容貌や雰囲気を捨てました。真逆になろうとした結果、ともすればギャルっぽいと言われるような見た目に……。でも、理由は後からいくらでもつけられます。嘘つくのは苦手なんですけど……アイドル活動にはこの方が向いてるとか、流行りに乗らないといぢめられるとか、その程度の言い訳なら思いつきます。

髪色はブロンズに染め、パーマで後ろ髪の量をかさ増しした上でロールさせました。そしてピアスの穴も開けました、途中で緊張の余りに気絶しましたけど……。なんとか、やけになって最後までやりました。やれるところまでやりました。

鏡を見ます。……一体誰ですか、これは。それが第一の感想でした。間違いなくこの見た目では目立ちます。人の視線を集めるで

しょう、人の視線はきっと光に飛び込む秋刀魚のように刺さってきます。それは私にとっては苦行に他なりません。想像しただけで脳が沸騰しそうになる上に、それは私が後戻りのできないことをしてしまったという現実をあらゆる感覚に語りかけてきます。耐えきれなかった私は、その場で吐いてしまいました。

……でも、同時に何か殻を破れた気もしました。私ははっきり言って、今までの自分のことが、容姿も含めて嫌いでした。もし、これが今までの自分との連続性に少しでも楔を打ち込むことになり得るなら、それも悪くないのかもしれません。

……とにかくこうして私は、森久保はお母さんの影から乃々として独立できた……はずでした。

出会い

私が姿を変えてわかりやすく怒ってくれたのは、当時のプロダクションだけでした。期待はずれなんですけど……怒られるのは嫌ですが、この苦行から解放されるのが何よりの目的だったのに……。

どうして、叔父さんたちが私を芸能活動から解放してくれなかったのかはよくわかりません。もしかしたら見た目が多少変わってもお母さんの代わりにはなり得る、お母さんを満足させられると思ったのかもしれないし、単にこのまま働いた方がお金になると思ったからかもしれません。お母さんは、相変わらず部屋に篭って私のライブのビデオを見て自己投影するばかりなので、効いているのかもよくわかりません。

ともあれ、プロダクションの関係者は怒りました。困るよ森久保ちゃん、それじゃ森久保ちゃんの方向性と違うじゃないか、わかってるのかい。……そんなこと、私が一番よく分かってるんですけど。わかってるからこそ、こうしたんですけど。

とにかく、プロダクションは私を追い出すか、強制的に元の姿に戻させるかの構えでした。そうなったら、叔父さんたちも流石に怒るだろうし、お母さんはどうなるかわかりません……。……やっぱり、私には全て荷が重すぎたんです。初めから無理だったんですけど。

どうして私は、元凶でもあるお母さんからもらった自信の持てない身体を傷つけてまで姿を変えたのに、大人たちの思惑に翻弄されなければならないのでしょうか。傷つけ方が足りないの……？　思わず、カッターナイフを左手首に押し当ててしまいます。

……むーりぃー……。私が臆病なことは依然として変わりません。跡になるような傷をつける前に、ちょっと血が滲んだところでカッターナイフを落としてしまいます。

そんな私のところに、一人の大人が寄ってきました。怖いんですけど！　どうして大人たちはみんな私なんかに何かさせたがるんですか、期待するんですか。いぢめですか。私なんて、ただの臆病で駄目な子で、もっと色々できる人がいるのに。この大人もきっと、私を、森

久保をいぢめるつもりです。
その大人は森久保に名刺を差し出しました。他のプロダクションのプロデューサー。今のプロダクションとの契約が切れたら、是非うちに移籍して欲しいという流れの話だということはすぐに察せました。その人は言いました。君なら、お母さんの代わりじゃなくて、ありのままでも輝けるよって。
初めは何のことかよくわかりませんでした。とはいえ、髪を染めてピアスの穴を開けたせいで元のプロダクションの仕事が打ち切られた手前、叔父さんたちは代わりが見つかったことは普通に喜んでましたし、これを機に平穏な生活に戻りたかった私ですけど、結局流されるまま、その事務所に移籍することになってしまいました。
……嫌々に決まってました。どうせ、今までと同じようなことをするんだろう。自分を偽って、お母さんの夢の代わりを務めることに変わりはない。そう、思っていましたけど。
……でも、ある時から違和感を感じたのです。何かが違うって。
ここでは、お母さんの理想をトレースしなくても、叔父さんたちはともかくプロデューサーさんたちが怒ることは何故かありませんでした。何ででしょう、私はお母さんの夢をなぞることだけの価値のためにここにいるんですけど……。
そして、この事務所にはあの人もいたのです。
渋谷凛さん。私がアイドルを嫌々ながらやって、その中で、百歩譲ってこのまま続けるとした場合、強いて言うなら、あんな風になりたいと思えた人。

私のせいなら

「乃々、緊張してる？」
　机の下に隠れて膝を抱える私にそう問いかけてくるのは凛さん。アイドルとしての、唯一の憧れの人。
「……あうう……当たり前ですけど……私が凛さんと組むなんて、畏れ多いというか何というか……魂が浄化されて天に還るんですけど……どうせ還るなら森に還ります……」
　この事務所に移籍してはや半年。未だ新しい環境に慣れず、唯一謎の安堵感を覚える空間を見つけたことくらいしか進歩の無かった森久保に打診されたのは、まさかの凛さんとユニットを組むことでした。
　正直、ここの新しいプロデューサーさんが私に何を期待してるのかわかりません。どうして私なんかに、お母さんの代役をしてきただけの私にそんな大役を任さるんでしょうか。
「まだ決定というわけでもないけど……乃々は私と組むのは嫌？」
「い、嫌なんてそんな……ても、責任が重過ぎるんですけど……。私なんかより、もっと適任な人がいると思うんですけど……」
　嫌どころかほんとうなら光栄なことのはずです。私が、強いて言うなら憧れてると言えるかもしれない凛さんと組めるなんて。でも、森久保なんかがそんな栄誉を受けていいはずはないです。私は隅っこで、日陰で最後まで全てをやり過ごすべきなのですから。
「そう、嫌ではないんだね。……最初は誰だって緊張するよ。私だって自信を持てない時はあった。でも、嫌じゃないなら乗り越えられると思うよ、乃々にはそれだけの可能性がある」
「む、むーりぃー……。わ、私にできるはずないと思うんですけど……」
「じゃあ、乃々はどうしたいの？」
「……わ、私は……あうぅ……」
　私は、それはやりたいに決まっていますけど。でも、それを口にすることは中々できません。森久保はただお母さんの心の均衡を保つ

ための生贄として必要とされているだけに過ぎません。私そのものには何の価値もないし、もちろん私に何かを決める権利なんてきっと無いのです。

「……わ、私だって、許されるなら……でも、絶対に凛さんに迷惑をかけてしまいますし……。……それに、誰も凛さんのステージに私が出ることなんて求めてないと思うんですけど……」

「……乃々がまだ早いと思うなら私もそれを尊重するよ。少なくとも私は待てる。……でも、もし一歩を踏み出して何かを変えられるとしたら、それは乃々自身にしかできないことだと思う」

「わ、私自身に……」

私自身にしかできないのと。それが決断をして、一歩を踏み出すことなのでしょうか。確かに、普通ならそうかもしれません。でも、その一歩の先にあるものを手にしていいか否か……その決定権を全て家族に握られていて、逆らえないのもまた私なのです。精一杯の反抗のつもりで見た目を変えても何も変わらなかったのですから……。

でも、踏み出すことそのものとか、過程とかで私にできることがあるなら……？　　もし、そこだけなら私が私でいられるとしたら？

私は、受け入れるべきなのでしょうか……？

「……凛さん、私は……！」

私が、自分でもよくわからないけど何かを言おうとしたその時です。プロデューサーさんが扉を開けて入ってきたのは。

凛と森久保のユニット結成計画ににクレームが入って一時凍結となる。

そんな、ほんとうなら私は安心するはずなこに、何故かしょんぼりな気持ちになる言葉を携えて。

「私と乃々のユニット結成計画が凍結……？　　クレームって言ってたけど、どういうことなの、プロデューサー？」

凛さんがプロデューサーに詰め寄ります。プロデューサーさんは、戸惑う様子もなく淡々と、しかしどこか残念そうに答えました。

「……そんな。乃々の叔父さんが、私たちのユニット結成に妨害工作

を？」
……本来なら、薄々予想できていたことです。こうなると思いたくなくて、現実を突きつけられるまで私はこの可能性から目をそらしていました。叔父さんがお母さんのために描いた図から少しでも森久保の活動方針が変われば、強硬手段を取ってでも修正するということくらい。
「……乃々、嫌なら言わなくてもいいけど、一体乃々の身に何があったの？　こんな強引な妨害が入るなんて、普通じゃ考えられない」
「……い、言うべきなんでしょうか……？」
正直、言いたいのか言いたくないのかもわかりません。もし下手なことを言ったら、家族に迷惑をかけてしまうことになりますけど……でも、今まで誰にも吐き出せずにいたことを言ったら少しは、何かが変わるのかもしれないし……私はどうするべきなのですか……？
「……大切なのは、乃々自身がどう思うかだよ。それに口を挟める人は、ほんとうなら家族にだっていないはずなんだ」
「……わ、私が……」
むりですけど……考えがまとまらないんですけど……。私は一体どうしたら……。
「……何なら、ちょっと場所を変えようか」

徒歩で３０分足らず。まさか事務所のそばにも、こんな落ち着ける森があったとは。
丸太のベンチやテーブルがある辺り、日によっては賑わっているのかもしれませんが、平日のこの時間には誰もいません。実家のそばの森と同じです。確かに、ちょっとは落ち着きます。事務所では壁一つ隔てたところには事務員さんや他のアイドルもいましたし、全員で机の下に潜るわけにもいきませんでしたし……。
「……乃々、ここに来たのは乃々に心の整理をつけてもらうため。落ち着くでしょ、森。だから、語るも語らないも乃々次第。私とプロデューサーも、自分たちだけでこの問題をどうにかするくらいの力はあるから。乃々は何も責任は負わなくていい。吐き出したい時に吐

き出す、それだけだよ」
と、凛さん。私の気を楽しようとして言っているだけなのか、ほんとうに自分たちで処理する手立てがあるのか、人と目を合わせることすらできない私には真意を読み取れません。
……でも、私が何も言わずに凛さんたちに任せてしまったら、それは私のせいで苦労をかけたことになります。……私には何もできません。でも、吐き出すことを含めて何か言うだけで凛さんたちの負担が減るなら……言った方がいいのでしょうか？
「……いえ、大丈夫じゃないけど大丈夫です、言います。……言いますから……私が今後どうしたらいいのか教えて欲しいんですけど……」
……涙が出てきます。私は、森久保はここで過去や家族との問題をどこまで清算することになるのでしょうか。未知数です。未知なものは怖いです。
「……うん、大丈夫。言えなくなったら、泣けばいい。ここなら誰もいないから……」
どうして、凛さんは私なんかに優しくしてくれるんでしょうか。
「……私の家は、お父さんの方が苗字を変えてたんですけど……今は別居していて……お母さんと弟と母子家庭なんですけど……ちょっと前に、お母さんが何かに取り憑かれたみたいになってきて……ある意味私のせいで……」
……私は、途切れ途切れに語り始めます。震える声で、でも、確かに凛さんとプロデューサーさんが聞いてくれていることを噛み締めながら。

森久保乃々の独白

……森久保の母方のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんはとても怖い人で……私も帰省する度に情け無いとかシャキッとしろとか森久保家の恥だとか怒鳴られてたんですけど……それで、人が怖くなって。

……だって、何を言っても怒るんです。言われた通りのことをしても、返事に気迫が無いとかやる気が感じられないとか言われるんですけど。だったら、最初から会わない方が、何も話さない方がいいじゃないですか……。

……それで、そのお祖父ちゃんたちは昔からお母さんにも厳しくしてたみたいで……昔ながらの良妻賢母を目指す以外は許さないって……。とにかく、お祖父ちゃんの頭の中では理想の家庭像が出来上がっていて、私もお母さんも、その線から少しでも外れることは許されなかったのです。

でも、お母さんは私くらいの歳の時、アイドルとか歌手とか役者とか、そういう世界に憧れてたらしいんです。……当然、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんが許してくれるはずはありません。家政大学に行って、良いお婿さんを貰い模範的な主婦になる以外にお母さんの人生の選択肢はありませんでした。

だからお母さんはずっと、自分のほんとうの気持ちを押し殺して生きてきて、私を産んでからも、自分を偽って母の務めをしてきたのです。……夢を諦めて主婦として家族のために生きることが敷かれたレールだったのだとしたら、もしかしたら私を産んだのも、私を育てていたのも、それも全て望まないこと、お祖父ちゃんの掌の上で転がされた結果に過ぎないのかもしれません。だったら、私はお母さんにとって、自分の生き方を否定した存在の残滓に過ぎないのかもしれません……。

……それもそのはずで、限界が近かったんです。お母さんの中で抑圧されたものはどんどん溜まっていって、殻を内側から引き裂いて……。それがついに破裂してしまったのは、私が在りし日のお母さんに本格的に似てきたからしいのです。私を見るたびに、時間を超え

た鏡を見ているような、そして過去の自分に責められているように思えたんです。どうしてアイドルにならなかったの、どうして私の夢を捨ててしまったの、どうして親に屈したの、って。

……そんなこと言われたら、まるで私がお母さんを責めているって言われてるみたいじゃないですか。

それからお母さんはおかしくなりました。家事もせず、私や弟との会話もほとんどできず、寝室に篭って、憧れていたアイドルのビデオを反復して見るようにに……。それだけが、自分の人生を持てなかったお母さんにとって許された選択肢だったのです。お祖父ちゃんが死んだ今、人生をやり直すにはもう遅いけど、思い通りにいかなかった現実から逃げて、過去の夢に浸る。その自由だけは手に入ったんです。だからお母さんは、初めて自由になって、他の全てを放り投げて虚ろな夢を見ようとしたんです。

……叔父さんたちは、これをお母さんが現実に耐えきれずに壊れたんだと判断しました。正確には、壊れる寸前で過去の夢を追体験して退行することで踏み留まっているのだと。そして、それができなくなってほんとうに壊れてしまったら、どうすればいいかわからないと。

……叔父さんは、お母さんがこれ以上壊れることを阻止するには、お母さん本人すら自分の面影を見出すようになってきた私を、森久保をアイドルにさせることで、お母さんに果たせなかった夢を疑似体験させるしかないって思ったらしいのです。……嫌でというか重荷でというか……とにかく逃れたかったです。それで私は、少しでも昔のお母さんと違う見た目になったら解放されないかと……。

自覚なき決意

「……乃々……そんなことが……」

凛さんは、私の言葉が終わるまで、ただ聞いていました。わざとらしく頷いたり、同情したりするような仕草も見せず、ただじっと、言葉をそのままに。

「……はいぃ……」

……そして私も言えました。言ったら、叔父さんたちに呪われるような気すらしましたが、言ったら案外、何か少しすっきりしないこともないような気もします。……もっとも、一時的なもので、むしろ言えることがわかった分楽になっただけのような気もしますが……。

……とはいえ、この肩の荷が降りた感じが何であれ、私が今まで抱え込んでいたものを吐き出せたのが無意味ではないことは、凛さんの顔を見ていたら何となくわかる気がしてきました。

「でも、今の話なら乃々が活躍するのは乃々のお母さんにとっても叔父さんにとっても悪い話じゃなさそうだけど……私とのデュオを妨害した理由はわかる？」

「……あぅ……それは私にもわかりません……。期待外れで申し訳ないんですけど……」

「……いや、乃々が悪いんじゃない。これだけのことがわかっただけでも前進にはなったよ。そうでしょ、プロデューサー？」

プロデューサーさんも頷きます。となると、我々がまず取るべき手段としては、下手に出た風を装って叔父と面談して探りを入れてみるかそれとも……。と思案しながら。

「……い、いえ！」

しかし、どういう訳か私は、森久保乃々は、突如として声を上げて立ち上がりました。私の身体を突き動かす感情が何なのか、そもそも理性なのか感情なのかもわからないですけど。

「……その前に、私が一度聞いてきてみます。……叔父さんよりも、お母さんに」

……森久保は一体何を言っているのでしょうか。私が、どうして嫌だったアイドル活動なんかを続けるために、同じくずっと嫌だった今のお母さんとお話しすることを買って出るというのでしょう。

……私は一体、何を怖れて何に縋っているのか……わかりません。考えれば考えるほど深淵に飲み込まれそうです。自分がどこから来てどこに行くのかみたいなことまで考えて怖くなってしまいます。

「……乃々、それでほんとうに大丈夫なの……？　　震えてるけど……」

「だ、大丈夫じゃないですけど……。……でも、今は私のせいで凛さんたちは迷惑してるんですよね……？」

私は今まで、駄目な子である自分が何かをしたらきっと人に苦労をさせてしまう、そう思って、何もできないでいました。でも、今回はどうなんでしょうか。

私が何かをすることで迷惑を緩和できるとしたら？　　お母さんに話を聞く、そんなことができるのは、間違いなく私だけなわけで……。

「……こ、怖いに決まってます、決まってますけど。お母さんとはもう半年以上話してないし、私の言葉がお母さんをさらに傷つけるかもしれませんけど……。でも、私が今やらないと、何も変わらないのなら……」

こうなったらやけです。やけの私が押し通ります。

……やけになった森久保、それが「私」なのかも定かではありません。でも、もし私が私でなくなって、そこにいる私ではない何者かが凛さんたちに迷惑をかけないようにしてくれるというなら……私はその存在に全てくれてやりますけどォ！

対話

「……お母さん……私ですけど……」

暗い部屋の中に、古い音楽だけが反響しています。積み上げられたビデオや本に挟まれた布団の上に座ったお母さんが、テレビをじっと見つめています。来る者を阻むこの空間はさながらお母さんの聖域（サンクチュアリ）。

「……昨日のお皿、下げておきますけど……」

ここまでは、まだ普段からしている会話です。お母さんがこんな状況なので、私と弟、週一で来てくれる叔母さんが分担してやってる家事に関してだけは最低限の言葉を交わしています。

ですけど、それ以外の会話は一切、この半年間絶っています。もう昔話を聞かされるのも怖くなって、少しでもそれに繋がる会話からは逃げていたのです。

「……今日見てるのは、何年前のライブですか……？」

……久しぶりの会話は、状況に関連づけて、しかし他愛もなく。第一声はできても、その後が難しそうです。

森久保はそんなことを言いつつ、恐る恐るお母さんの顔を覗き込もうと……して、先にテレビの画面に目が引き寄せられました。

「……凛さん……？　いや、違う……？」

テレビの画面に映っていたのは、まさしく凛さんに似た雰囲気のアイドルでした。いえ、別に双子のようにそっくりなわけではなくて、冷静にちゃんと見れば別人だってはっきりわかります。でも、一瞥した時のふんわりとした印象が何となく良く似ているのです。

「乃々ちゃん、この子好き？」

画面に釘付けになっていると、お母さんが顔をこちらに向けないままそう言います。

「ほら、お祖父ちゃん厳しいけど、私って一回だけ目を盗んでオーディション行ったことあるじゃない？」

初耳なんですけど。

「この子ね、その時私と選考で競り合ったの。良い勝負だったわ。お

祖父ちゃんに叩かれた痣さえ無ければ、私がこのステージにいたのよ」

お母さんは相変わらずこちらは見てくれません。

「でもね、3年後に覚醒剤で捕まっちゃったの。全て無駄になったの。私が、やっとの思いで受けたオーディションで勝ち取ったのに、私から奪った幸せなのに、もったいないわよね」

お母さんは、家での生活も、付き合う友達の選び方も、お祖父ちゃんに厳しく統制されていました。そんなお母さんが貴重な反抗を犯してやっと受けられた唯一のオーディション。その価値の高さは計り知れません。

このアイドルは、そんな価値のあるオーディションで勝利を掴んでおきながら自ら愚かな罪に手を染めて栄光を無に帰した。もしかしたらその場にいたのが自分かもしれないお母さんが、そのもったいなさに対して感じる感情はなんでしょうか。怒りか、悲しみか、呆れか……。

「……この人は、どんな人だったんですか?」

恐る恐る聞きます。しばらく話していないお母さん。「おかしくなった」と言われて久しいお母さん。果たして私の質問を理解して、答えてくれるのでしょうか。

「私ね、思わず泣いちゃったの。この子に負けた時。そしたらこの子、私を慰めようとするの。手を差し伸べようとするの、変に私の健闘を褒めようとするの。思わず、怒ってこの子を叩いちゃったわ。私と違って、機会にも自由にも恵まれてるくせに、アイドルになろうと思えばいつでもなれるくせに、私に何がわかるのって。……悪いことしたと思うわ。でも、あの時はほんとうに悔しかった、自分が惨めだった」

もともとしていた昔話の続きなのか、私の問いに答えているのかわからない文脈でした。でも、お母さんがこの子のことをどう思うのかは最低限わかります。そして、少なくとも記憶などははっきりしていて、過去はちゃんと過去と認識していることも……。

「……今でも、あの子に何か思うところはあるんでしょうか……?」

「……乃々ちゃん、凄いわね」
私の問いに、次はＤＶＤを入れ替えることで応えるお母さん。これは、こんなにあっけなく再生をやめてしまうということは、もうあの子にそこまで固執していないととって良いのでしょうか。
「このステージの上から見える景色は綺麗でしょう？　私の景色なのよ……」
次のＤＶＤは……森久保のライブ映像でした。今までは恥ずかしくて見ていなかったので、私が自分のライブ映像を見るのはこれが初めてです。
「星空のような観客席……森のざわめきみたいな声援……稲妻のようなサーチライト……全てが私の手の中に……」
お母さんはそこまで言ったところで、小さく笑いました。
「だったら良かったのに……乃々ちゃん」
それは自嘲。そして、語りかける相手はこの私であるとともに、画面の中で籠の中で足掻く小鳥のように惨めに舞う私。
そう、お母さんはちゃんと認識していました。自分自身と、画面の中の私と、そして今ここにいる私とを。

信念、私はここに

……状況を整理します。

お母さんは、相変わらず半年前と同じように、潰えた夢への感傷に浸りつつ現実逃避をしていました。そして、その思い出の中には凛さんに似た雰囲気の女の子がいました。多分、叔父さんが私と凛さんが組むのを妨害したのは、お母さんが自己投影している私が凛さんと並ぶことにより、トラウマが呼び覚まされてもっとおかしくなることを警戒してのことでしょう。

……しかし、それはお母さんが自分自信と私・森久保乃々、そしてトラウマのある人と凛さん。この四者二組を区別できない、全く境界を引くことができないだろうという前提のもとの予測です。でも、私を含めた家族のほとんどは、誰もお母さんの病状の変化を見てこなかったのです。お母さんのほんとうの状態を知るのが、自分たちの対応の結果を知るのが怖くて、あの聖域にお母さんを閉じ込めたまま、なるべく距離を置いて、真実から目を背けてきました。

でも、ほんとうのお母さんと半年ぶりに話してみて、そうではないことがわかりました。決して普通の状態だとは、元に戻ったとは言えません。でも、確実に有していたのです、自分と他者を、他者と他者を明確に線引きするだけの理性は。

それが元からだったのか、快方に向かっていることを意味しているのかはわかりません。少なくとも、半年前の段階ではもっと酷かったような気もしますが、これとてお母さんと関わらなかった期間が長過ぎた故の悪い意味での思い出補正かもしれないです。もしかしたら、私がアイドル活動をしてるのを見て、少しだけ良くなった可能性もほんの少しだけあるのかもしれません。

とはいえ、今重要なのは、叔父さんの懸念が杞憂な可能性もあるということです。もちろん、確実にお母さんに影響を及ぼさないことを考えるなら、森久保と凛さんがユニットを組むのはよした方がいいのでしょう。でも、今のお母さんは明らかに最低限人の区別ができる状態でした。だとすれば、むしろ何の変化も無く、今のままの私を見せ

続けることは、お母さんのためになるのでしょうか。
……少なくとも、良い影響は与えないでしょう。確かに、私がお母さんと話して感じた主観的な印象が間違っていたなら、叔父さんの言う通りこのまま行くのが一番です。でも、もしお母さんが快方に向かっているのだとしたら、お母さんが見る私にも何らかの変化があって初めて、何か殻を破れる可能性もあるかもしれないのです。
とはいえ、森久保もこの結論を自分の中で出して、苦しみました。私が自己を放棄すれば、全ては今まで通りになる。私が自分として動けば、全てが私に帰属し、そして何かが壊れて何かが生まれる。こんなの、森久保には重過ぎるんですけど……。
でも、私には目を逸らすこと、じゃあそこには壊れるものは無いのか、そもそも目を逸らすという選択が私がしたものなら、時計の針を止めたのも私ということになるのか……。正直、魂まで吐いてしまいそうです。
「……なるほど」
私の話を聞いて、凛さんとプロデューサーさんは唸ります。
「……やっぱり、聞く限りは乃々次第だね」
「そ、そうなのでしょうか……」
「うん。その様子なら、乃々が私と組んだからと言って当然にお母さんに害があるとは言えないし、プラスになる可能性もある。でも、叔父さんはそうは思えないんでしょ？　だとしたらこれは、乃々自身と叔父さんの信念のぶつかり合いの次元の話だよ」
「……森久保の……私の……信念……」
いきなり信念なんて大それたことを言われたって、私にはそんなものの思いつきません。森久保は、ただひたすら家族に翻弄されて生きてきたのだから。
「難しく考えないでいいんだよ、乃々。今乃々がどうしたいのか、譲れないこと、変わりたいこと、それを紡ぎ出せば、乃々なりの信念が見えてくると思う」
「……私の譲れないこと……私が変わりたいこと……」

……譲れないこと。それが、今の私の変わらない気持ちを意味するとしたら、凛さんと組むこと……あれ、なんでそんなことが真っ先に思い浮かぶの？　　私はつい昨日まで、荷が重いって逃げてたはずなのに。

……私が変わりたいこと。だとすればそれは、私が私になることでしょうか。家族のための生贄から、少しでも、指一本でも脱却した森久保乃々という個人で何かを初めてすること……。

でも、それは未知への旅。私が私になった時、今までに蓄積してきた分も、これからの分も、全ての痛みが私にのしかかるのです。

でも、それでも。

「……そんなの……そんなの、凛さんと一緒に組みたいに決まってますけど……！　　私はきっと凛さんの足を引っ張るかもしれません。でも、もし私なんかが自分の気持ちを言うことが許されるなら、私は叔父さんの意に反してでも、このユニットを組みたいんですけど……！」

「……そう。よく言えたね、乃々。それなら、あとは乃々の覚悟次第。私も全力でバックアップするよ」

優しく同意してくれる、凛さん。その笑顔は、いつか見たような気がする、いえ、ほんとうは見たかったお父さんとお母さんのそれの上位互換のようでした。もう見られないかもしれないものを、凛さんはさらに洗練して見せてくれました。

プロデューサーさんも力強く頷き、裏方は任せろ、森久保は森久保のしたいようにやれ、叔父に自分はここにいると見せてやれ、と言ってくれました。

「……うぅ……皆さん、そんなに頼もしくしないでください……そんなに頼もしくされたら……私も後戻りできなくなっちゃうんですけど……」

全てが初めての

その後、私たちは忙しくなりました。

私は迷惑をかけないかの心配で蒸発しそうになりながらも、何とかして、叔父さんの意に反しただけの価値を得るべく、練習に打ち込みます。再び、お母さんとは話せなくなりました。

そして凛さんは私のペースに色々と合わせてくれて、プロデューサーさんは時には徹夜をしてでも、この一度頓挫しかけた企画を通らせようとしていました。二人がこうも頑張るようでは、今さら逃げられなじゃないですか……もう、やるしかない。

そして一月後に迎えるミニライブ当日。

プロデューサーさんは、最後まで叔父さんサイドの勢力と競り合っていたようです。結果、中継を見るお母さんの側に叔母さんが待機して、少しでも変調があったら、会場側で待機する叔父さんが動いて私たちのステージを中断し、合同ミニライブのスケジュールを繰り上げるよう根回しをする形になりました。これが、私たちのライブを認める条件です。

「……あぅ……ついに始まってしまった……。まさか……こんなことになるなんて」

このライブに臨むにあたっての緊張は、今までのものを超えています。こんな私が今までライブを乗り越えるという天変地異のようなことが今まであったのは、森久保があくまでもお母さんの思い出の代わりという立ち位置だからこそ、私が自分自身と本気でぶつかる必要が無かったからでした。

でも、今回は紛れもなく、私自身の活躍する場なのです。全てが、責任も後悔も懺悔も何もかもが私に帰するのです。……既に失敗する自分ばかりが脳裏によぎって、このライブ当日を迎えてから三度は吐きました。未来の自分を思い描くだけで、自分の全てが嫌になって。……こんなの、無理に決まってますけど……。

でも、もし無理じゃないとしたら……？

「……乃々が選んだ道に間違いは無い、そう私は信じるよ。ううん、信

じていたからこそ私もプロデューサーもついてこれた。だから、あとは成功させるためのピースは一つだけ。乃々自身が、自分の道を信じること」

「……うぅ……でも私、今まで自分のことを信じたことなんて無くて……ずっと家族の思惑に振り回されてきましたし……その流れに刃向かうこともできなかった弱くて駄目な子で……」

「そんなに難しく考えないで、乃々。少なくとも、乃々が自分の流れを初めてとは言え作ることができた、だから今ここに立ってるんでしょ？」

凛さんはそう言って、私の手を握ってくれます。誰かに手を柔らかく、しかし頼もしく握ってもらえるなんていつぶりでしょうか。

「……うぅ……信じるとかって言っても、なんていうか、自己暗示みたいなことしかできないんですけど……」

「それで十分だよ。ある程度のところまで乗り越えられれば、また変わるから」

私には、凛さんの超然とした構えに込められた意味を理解することはできないでしょう。でも、自己暗示で楽になれるなら、それしかありません。自己暗示で、お母さんと向き合った時のやけになった、私じゃない私を召喚しよう……。

ステージに上がります。

視線、声援、今回ばかりは全てが私自身に向けられているものです。今までのように、私の後ろにいる存在に受け流すことは許されないのです。

まるで、狩の成果として吊るし上げられて見せ物にされた森の動物のような気分……。

でも、同時に他の名状しがたい気持ちも感じます。自分で選択してここにいる私、その私自身に向けられる期待。初めての経験です。これは確かに「痛い」経験のはず。恥ずかしさ倍増で、責任重大で、逃げ場も無い、私には痛すぎる舞台に他なりません。なのに、痛みに晒される表面部を補完するかのように、私の芯には熱く、でも痛くない何かがあるのです。そして、その鼓動は確かに痛みにも連動していて

……。

……自分自身で何かを貫くというのは、かくも痛く苦しく、でも何か心地良いものを同調して感じるという、麻薬的なものなのでしょうか。正直、森久保には……私には、何度も耐えられるものではないです。

ですけど、私はもう後戻りできない舞台に立ってしまっています。逃げられないなら、例え私がダメで、本来ならこんな負担ではパンクするような子だとしても……今この瞬間だけは、この不条理で甘美な刺激に甘んじてもいいのでしょうか。

もし、この声援が、隣にいる凛さんの頑張りがそれを肯定する答えなのだとしたら……。

……ライブは、いつの間にか終わっていました。私はただ、痛みを伴う充足感を感じながら、凛さんの足を引っ張らないように必死にやっただけです。でも、いつもより早く感じられました。そして、いつもより早く過ぎたにもかかわらず、私はその中に自分自身の存在を確かに感じた気がしました……。

その痛みも伴う確かな自分の存在感、自信がないながらもこの手に感じられる虚無の対極。そんなものを噛み締められるのは初めての体験。こんな何も無い私がわがままを通して、虚無以外のものを得られるとは知りませんでした。

……でも、慣れない私にはそれが正のものであれ負のものであれ、どのみち負荷が大き過ぎるのでしょうか。ライブが終わった後、私の中に燻るものは私の全身の神経系を引っ張り合うように圧迫します。

……あれ？　……だんだん意識が……。

「も、森久保ォ！」

足の感覚が無くなり、視界が暗転。しかし、私の脳天が床に当たって割れることはありませんでした。力強く、頼もしい存在にギリギリのところで支えられた、私の記憶はそこで途切れます。

やっぱり、もりくぼはこの痛みに耐えられなかったのです。ですけど、この痛みを受け入れることは……少なくとも今回はできたみたい

です。

私の作った結果

お医者さんが下した客観的な結論は、貧血。

もっとも、私は別に持病として貧血気味だったわけではありませんけど。……精神的な負担で何故か貧血になる、私はたまにあるんですけど、他の人はどうなんでしょう。怒られてショックを受けた時とか、取り返しのつかない失敗に気づいた時とかに冷や汗が出て目が開けられなくなって全身の力も抜けて……。

ともあれ、凛さんとプロデューサーさんが言うには、ライブは無事に成功したようです。私が倒れたのは、全てが終わって退場する時のこと。凛さんと私のユニットは好評で、続投を望む声も多かったそうです。そんな漠然とした業績を言われても何だか実感が湧きませんでしたが、凛さんが組めてよかったと笑顔で言ってくれると、何となくわかりました。……同時に、自分なんかがこんな期待の的になっていいのかとの罪悪感もありましたけど。

……さて、ほんとうに懸念すべきは私のお母さんです。お母さんを心配するあまり叔父さんは私の独自の路線には反対し、そもそもお母さんがおかしくなったのが、私がこんなことに巻き込まれた原因でもありました。しかし、考えてみればそれが無ければこの痛みに満ちた達成感を知る機会も無く、凛さんと知り合うことも無かったのです。ほんとうに、全体としてらどう捉えたら良いのか私にはわかりません……。

……叔父さんの心配は杞憂だったようで、私のライブを見たお母さんの状態が悪化することはありませんでした。むしろ、私を見て、一筋の涙を静かに流したとのことです。自分にも理由がわからない涙を。そして、その直後少しの間だけ、叔母さんと言葉を交わせたらしいです。

……多分ですけど、もしお母さんが私に自己投影することで精神の均衡を保っていたのだとしたら、実は叔父さんたちも、そしてお母さん自身も、一番「効く」のが何なのかを勘違いしていたのではないでしょうか。

これは、プロデューサーさんや凛さんの意見も交えての推測ですけど……お母さんが自分の青春から真に奪われたのは、単に芸能人になりたいという夢だけではなく、それに必要な自由、或いはその自由を求められる信念であり、そこに確立された自己なのではなかったのかと。

だから、私がわがままを通して、自分のやりたいようにやり切り、その痛みも快感も一人で抱え込んだ姿こそが、自分の作った世界にいる姿こそが、単に言われてアイドルをやっている、つまり過去のお母さんと同じように縛られている私の姿よりも理想的なものに見えたのだとしたら……。私が凛さんとペアを組んだのも、むしろ自分が過去のトラウマを、敗北を克服しているように見えたのだとしたら……。

……お母さんは今、病院にいます。今まで世間体を気にして部屋に軟禁状態にすることを決めていた叔父さんも、今回の件で自分の推測や方針が外れることを自覚して、重い腰を上げたようです。

……魂が消し飛びかけてまだ回復していない私にはまだ、お母さんに再び会いに行く勇気はありません。でも、もし森久保が、叔父さんの干渉がめっきり減った私が、今後も独自に何かをしてお母さんが良くなることがあるとしたら……その時は、ちょっとだけ様子を見に行ってもいいかも、と思いますけど……。

今日から私は

「乃々、復帰おめでとう。……こないだは色々あったから気に病むことは無いよ。私以外にも、今後乃々と組む人はいるみたいだけど、私はいつでも後ろから支えるから」

倒れた後に療養休暇を貰った私が久しぶりに事務所に出向くと、凛さんはそういって、休んで迷惑をかけたはずの私に頼もしく微笑みかけてくれます。

「うぅ……り、凛さんがそう言ってくれるのは嬉しいんですけど……。私なんて、もりくぼなんて、壁をひとつたまたま転びながら超えたところで、ただのもりくぼに過ぎないんですけど……そんなにもりくぼに期待されても……」

「でも、乃々はここにいる。私は乃々に重荷がのしかかったら、それを一緒に背負うつもり。決して無責任に期待だけするつもりはないよ」

「あう……もりくぼ、また迷惑かけてしまうかもしれないですが……。それでも、もりくぼを見捨てないでくれるんですか……？」

「うん、当然。……ところで、乃々って前から、自分のことを苗字で呼ぶことあるなって思ってたけど、今日はなんか雰囲気が違うような……」

「……えっ⁉？」

久々の出社の緊張も相まって、明確な回答を事前準備してこなかった問いを前にびくっとしてしまったもりくぼは、ノートを落としてしまいました。

「……乃々、何か落としたよ。……日記？」

「ぴぃっ⁉？　　み、見ないで下さいぃ……」

しかし既に時遅し。ポエムを交えた日記ノートは全開の状態で落ちていたため、見開きが丸々凛さんの網膜に焼き付いてしまいます。

ポエム入りの日記が公開なんて無理なんですけど！　　確かにもりくぼはポエムとか趣味ですけど、別に人に見せるほど得意というわけでもないし、もりくぼなんかのポエム、見て心地良いと思える

はずもありません。笑うか不快になるかです。
「ご、ごめん……。あれ、この日記、少し前から一人称が変わってる……なんか修正した跡もあるけど」
……見られてしまいました。ポエム日記を人に見られるのは初めてですけど……でも、一人称に関心が行ってくれたお陰で、肝心のポエムを見られる前に回収できたのは不幸中の幸いでしょうか。とりあえず、安心して良いのやら……。ともあれ、ポエムに踏み込まれるよりは、一人称の話の方が良いです。だって、それは私が私になるためにきった舵なのだから。
そう、この日記の私の自分自身を呼ぶ表記は、それまでの「森久保」と「私」の表記から、ひらがなの「もりくぼ」に変わっていたのです。多分、無意識に「Ｍｏｒｉｋｕｂｏ」と喋る時の発音も、言われてみれば変化していたのかも……。
「……私、これまではただの『森久保』だったんです。家族の中でも何もできずに流された挙句、私とお母さんの間の区別まで取り払われて……。だから、私は自分のことを、森久保から独立した個人だと思えなかったんです」
ほんとうは、辛かった。当時はむしろそれが逃げにも機能していたけど、今ならわかります。「私」がいないことの、痛みとは違う空虚さが。
「でも、こないだのライブで初めて、私は私として存在して良いんだと言われた気がしたんです。だから、これまで自分を納得ささるために自称してきた『森久保』呼びを変えて、『乃々』って自分を主張できたらどうなるんだろうって思ったんですけど……」
「……恥ずかしくて、罪悪感も感じちゃったんだね。あまりに『森久保』だけだった時期が、それに甘んじた期間が長かったから」
「はい……情け無さすぎて森久保に戻りたいくらいです……。でも、少し柔らかく、形を粘土みたいに変えられそうな感じに『もりくぼ』って言うのなら、何とか……」
私はいつか、ただの「乃々」になりたい。でも、私なんかにいきなりのそれは無理でした。でも、だからってワンクッションを置くなん

て……ほんとうに駄目な子です。
「なるほど、過渡期ってことか。……私は、それでもいいと思うよ。人は、自分を見つけるのには時間がかかるもの、そしてこの世の中が与えてくれる時間は、ひとが自分自身と満足に見つめ合うにはあまりに少なくから。……だから、乃々が過渡期に移行できたことは、それだけでも大きな一歩だと思う」
「凛さん……」
凛さんは、もりくぼに手を差し伸べます。
「乃々がほんとうに『乃々』になれるまで。それまで、私は付き合うよ。乃々が自分を忘れないように、『乃々』って呼びながら」
涙が溢れてきます。ただでさえ、森久保だった時には必要とされなかった私。私が、もりくぼが、乃々が必要とされ、認めて貰える場所が、ようやく見つかったんだ。痛みも恥も伴う怖い世界。ですけど、もりくぼは、乃々はここにいていいのです。
また逃げてしまうかもしれません。迷惑もかけるかもしれません。無理なことがいっぱいあるかもしれません。でも、私が私であることは許されるんです。
だったら、私はようやく安心して、この過渡期に甘んじられます。
だから今日から私は、もりくぼは、もりくぼです。